

令和3年度体育・保健体育指導力向上研修（ボール運動）研修報告

伯耆町立岸本小学校 教諭 足立崇

1 はじめに

本研修は令和3年5月25日から27日までの2泊3日で行われる実技研修のはずだったが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響のため、オンライン研修で行われ、実技研修は行われなかった。実技を通して得られるものがたくさんあると思っていただけに残念だった。

2 講義 新学習指導要領を踏まえた体育、保健体育授業の考え方について

- 単元、授業の中で「何ができるようになるか」「どのように学ぶか」「何が身についたのか」ということを教師が児童と共有し、お互いが目標を明確にもつことが大切。
- 「主体的・対話的で深い学び」は、これまでも行われてきた教育実践に基づきながら授業を工夫、改善する必要がある。
- 生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現する観点をふまえ、台上前転、バレーボールなど、非日常の動きの中からその価値や特性に着目して、できるようになる楽しさや喜びを味わうことのできる授業改善をしていく。

3 協議 新学習指導要領の実施に関して直面している課題

- 評価の仕方に難しさを感じている。思考・判断の見取り方は、ワークシートの工夫をして理由を問うことをしていけば見取りの一助となる。しかし、ワークシートでは文章力の低い児童の見取りが難しい。児童の発言、観察からの見取りを評価に生かさなければならない。
- ICTの活用について、動画などを撮影する際、タブレットは使いやすいが、クロームブックは児童には重く扱いにくい面がある。機器の長所と短所を教師が把握し、目標を達成するために活用するとよい。

4 講義 新学習指導要領を踏まえた各領域等における指導の在り方（ボール運動）

- ボール運動の楽しさの一つに対戦相手と競うことがある。相手がいてこそできることから、相手を尊重する気持ちを育てたい。また、ルールや作戦を工夫して集団の攻防を楽しむことを学ばせる。
- ゴール型（空間）、ネット型（相手の取りにくいボール）、ベースボール型（守備の隊形、走塁）の3つの型の特性を理解する。ネット型は、ボールが取れる位置、ボールを操作しやすい位置、ボールが飛んでくるコース、落下地点への移動が大切。
- 準備運動は、ゴール型は鬼遊びが有効である。空いている場所を見つけて移動することや相手をかかわすことを習得する。ネット型、ベースボール型はボールの操作を身につける事ができるように、投げる、打つ、蹴る、的に当てるなどの運動をさせて操作性を高めたい。ネット型の低学年での事例では、爆弾ゲームがある。相手コートにボールを投げ入れて得点を競うもので、ボールの落下点に素早く移動する動きを身につけることができる。
- 差を包括する「共生の視点」を重視する学習指導が必要。下手な子が排除される（静かな排除）のではなく、誰もが参加できる教材作りが必要である。例えば、ソフトバレーボールで、「3段攻撃をする」が目標の際は、自分と仲間の役割を理解し、どこにボールをあげたらよいか、どこを守ると

よいか考えるようになる。「作戦をいかして攻撃する」という目標の際は、作戦通りにボールを操作できるように1回のキャッチを許可して思い通りの位置にパスを出させると作戦をより考えるようになる。また、3段攻撃で返球した回数やアタックの回数をペアチームに記録してもらったり、目標達成の価値づけを教師が行ったりすることで一人ひとりの貢献感につながる。小学生段階ではボールをはじく技能のオーバーハンドパスやアンダーハンドパスの技能を簡略化するとボールがつながり、ボールの操作ではない目標を達成しやすくなる。ビニール製品のソフトバレーボールは操作が簡単で50g、100gなど実態に合わせてボールを選ぶとよい。ルールを寛容化で目標を達成させることもできる。キャッチの許可（回数を1回だけなど制限は加える）やボールの特性によってはワンバウンドを許可するルールを取り入れることで、ボールを触る回数を増やしたりチーム全員の参加を目指したりすることができる。コートを狭くし、3人対3人、2人対2人などにすればボールにかかわる場面が大幅に増える。

- ICT活用の面では、クラスルームに資料として動画を貼っておくと、家庭でも見ることができる。学習カードの記入で意見交換が短時間でできる。ICTの活用により、運動の日常化ができるので、ICT環境を整えることも大切になる。また、作戦面で、ICTを活用するとよい動きや課題を確認できる。
- 帰りの会を有効に活用すると運動が楽しいという気持ちを膨らませることもつながる。運動を楽しく感じることは、資質能力の第一である。

5 講義 新学習指導要領に基づいた指導と評価

- 指導と評価・評価の計画が大切。年間計画と6年間の系統立ては大切。評価規準となる児童の姿を指導案に示しておく。また、何のために評価するのか、目的をはっきりさせて評価を行う。評価は、学習改善、指導改善、必要性の見直しのために行う。单元ごとに総括する。
- 評価する点、評価規準について、児童、保護者と共有する。
- 「思考・判断・表現」は「思考・判断」と「表現」に分けて表す。「主体的に学習に取り組む態度」の評価規準は4つの項目を意識して明確に表す。
- 指導と評価の計画を立て单元目標が達成できるように評価を指導にいかす。

6 協議 各領域等における体育が苦手な児童生徒のための授業づくり

- 差をなくすための工夫
 - ・触る回数を増やすために、3段攻撃回数を得点化したりチームの人数を減らしたりすることは有効だろう。ボールにかかわった記録をとり、みんなが楽しめる意識を高める。ICTによる記録は自チームで行うとよい。
 - ・ボールを軽く大きくして恐怖心をなくす道具の工夫は必要。
 - ・上位の児童のモチベーションをあげるために、アシスト、アドバイスの価値化、称賛をする。
- 評価と指導
 - ・評価を指導に生かす。なぜできないのか検証して指導に生かす。

7 協議のまとめ

- 授業のめあてによっては、だれもアタックできない高さにすると差はなくなる。みんなに平等に機会を与える。みんなが同じようにできるためには、低位の児童に配慮して同じようにできるようにすると意欲の向上につながる。さらに、意思決定をするまでに難しい児童は機会を均等にするために不公平かもしれないが参加を促すために必要な手立てとしてルールの配慮をするとよい。
- 配慮を要する児童がいればいるほど勝敗へのこだわりはなくなる。差があることを認識して勝敗を求めず、全員が楽しめることを求め、お互いが参加できることを考えている。しかし、チームの力を均等にすればするほど争う優越感を得ようとする。劣等感ももちやすくなる。勝敗へのこだわりを別の課題に変えてしまう。生涯スポーツを考えると、学級内の差がある中では、全員が楽しめるようにするために同じルールではなくてもよいし、差があってもよい。不公平感があるならどうしたら全員が楽しめるかという問いかけが必要である。何が大切か、共生の視点をもつことが必要。大会をすると勝敗にこだわるようになるから、それを避けることも時には考えるべきである。

8 講義 学校の体育活動中の事故防止

- 事故の起こった事例を知り、安全管理した上で、どんな時でも事故は起こりうるかもしれないという認識でいることが大切である。
- 教師のまちがった指導によって事故が起こることはあってはならない。指導によって避けることのできる事故は、絶対に避けるべきである。
- 児童一人ひとりが事故を避けられるように知識をもたせ、よりよい行動を判断できるように指導することが求められている。

9 まとめ

今回、ボール運動の苦手な児童への指導を学ぶことを第一の目標として研修に参加した。今後の授業にいかせる内容のことを教えていただいたことは大きな収穫となった。苦手な児童が意欲的に学習に向かうための心理面、技術面を支えるための環境を整える方法をいくつも考えることができた。また、全国の間と協議の機会をもつことができ、とても有意義な経験をすることができた。